現場の実践紹介ー❶

子育て支援は、保護者のニーズ（必要性）とウォンツ（要求）を切り分けて

幼稚園で子育て支援を行うことについては様々な考えがあります。早い段階からいろいろな形で子育て支援に取り組んできたあけぼの幼稚園の安家（あけ）周一先生に、子育て支援の捉え方や具体的な取り組みについてお聞きしました。

学校法人あけぼの学園
あけぼの幼稚園

理事長・園長　安家 周一先生

学校法人あけぼの学園
あけぼの幼稚園

昭和29年創立。「自由な子ども」「伸び伸び保育」「仲間づくり」「統合保育」「家庭と園とが育て心を一つにする」を保育の5つの柱に据える。

園長●安家 周一　（大阪府私立幼稚園連盟理事長）
所在地●〒561-0882　大阪府豊中市南桜塚2丁目14番7号

URL　http://www.akebono.ed.jp/

現場の実践紹介

あけぼの幼稚園の保育や子育て支援について教えてください。

まず保育についてですが、あけぼの幼稚園で大切にしていることは「自由な人間になる」ことです。自分の良心に基づいて自立的に行動する「自由な人間」になることを目指し、「遊び」にこだわり、「毎日の生活」にこだわり、「大人が子どもと共に育つ」ことにこだわりを持っています。また幼稚園と保育所を併設していて、保育所の子どもが幼稚園の時間は幼稚園の教育を受けていることも特徴の一つです。

その他に、年齢別のクラスの枠を一時的に取り除き、住む地域によってグループ分けをして異年齢の子どもたちと交流する活動も行っています。

子育て支援メニューは、下の表の通りです。幼稚園と保育所を併設していることで、子育て支援には両方のスタッフがローテーションを組んでうまくかかわることができています。表の上の方にある「延長保育」「ホームクラス」は幼稚園のスタッフが担当し、その下にある「さくら組（さくらんぼ組）」「一時保育」「たけのこランド」「よちよちくらぶ」「青空保育」は保育所のスタッフが担当しています。

「さくら組」には、２歳児が週１日登園してきます。３歳の誕生日を迎えた翌月からは「さくらんぼ組」に進級し、登園も週３日に増えます。目的の一つは、就園前に同じ年齢の子ども達が刺激し合う環境で生活することで、育ち合うことにあります。２歳を対象にしたメニューには、他に「たけのこランド」もありますが、こちらは10回の登園プログラムです。最初の３回は親子で楽しみ、４回目以降は子どものみ参加する形態です。日ごろ、家庭ではできないダイナミックな遊びを楽しんだり、10回のうち３回は１時間程度の懇談を実施したり、子育ての悩みなどを話し合っています。この時代の子どもたちを育てることの楽しさを実感したり、子どもたちの育ちの姿や課題を浮き彫りにしたりするのが主な目的です。

あけぼの幼稚園の子育て支援メニュー

	概要	保育曜日・時間など
延長保育	幼稚園保育終了後、理由を問わず不定期に子どもを預けることのできる制度です。	月～金　幼稚園保育終了～18:00
ホームクラス	幼稚園在籍の保護者で、母親等が仕事を持つなどの理由により、定期的に幼稚園保育終了後、子どもを預けることのできる制度です。	月～土　幼稚園保育終了～最長19:00
さくら組（さくらんぼ組）	集団化前の時期に、同年齢の子ども達が刺激し合う環境で生活し、育ち合うことを一つの目的として週1回～3回の保育をします。	火（さくら組）9:00～14:00 月・火・木（さくらんぼ組）9:00～14:00
一時保育	豊中市在住の保護者の希望により、仕事、看病、冠婚葬祭、リフレッシュ等で、断続的に預けられる制度です。	月～土　7:30～18:30
たけのこランド	2歳児の方を対象に、親子で集う日、子どものみで集う日、お弁当を持って少し長い時間を楽しむ日と段階を経て組み立てています。期間中懇談もあります。	年間3期（各10回）
よちよちくらぶ	2歳に満たないお子様を対象に親子で集っていただき、親子一緒に楽しんでいただくプログラムです。	年間5期（各6回）　10:00～11:30
青空保育	親子参加型の集いです。保育子育て相談もでき、月1度、誕生会もあります。	金　10:00～11:30

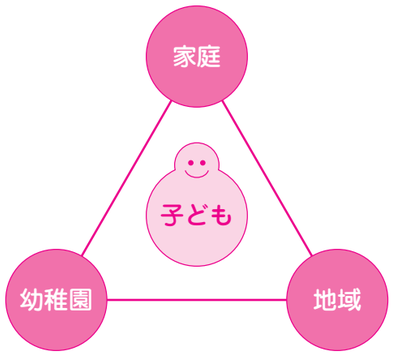
※「あけぼの子育て支援メニュー」より一部抜粋

幼稚園教育と子育て支援を両立するコツはあるのでしょうか？

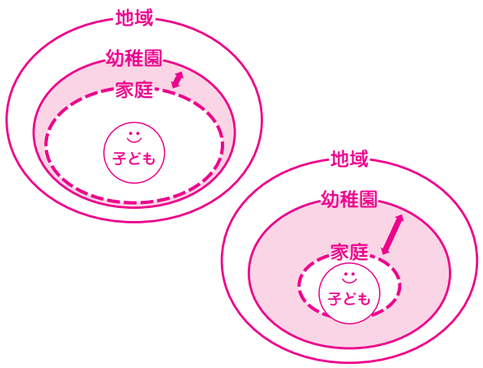
あけぼの幼稚園では、保護者の「ウォンツ（要求）」と「ニーズ（必要性）」を切り分けて考えています。「要求」に対しては、園の考え方を保護者に伝えて、園の意図を考えてもらうようにしています。例えば、私の幼稚園では、週５日のうち３日は園の厨房で手作りした給食を出して、２日はお弁当です。すると保護者から、「せっ

▲ホームクラス（預かり保育）の様子。幼稚園での保育終了後、最長で19：00まで過ごすことができます。

●図１　※それぞれが自立して機能することが必要な三角形のモデル



●図２　※家庭や地域が役割を果たす「厚さ」に応じて、柔軟に機能を変える幼稚園のイメージ



かくいい厨房があるのに、どうして毎日給食にしてくれないのですか？」と言われます。そういった意見に対して私たちは、「お弁当があることで家庭の味を子どもに引き継げたり、お弁当があれば、帰りの時間を気にせずに園外保育に出かけたり、長時間のダイナミックな保育も展開できるのです。だから週２日のお弁当は譲れません」と伝えます。またある保護者は、「園で栄養価の高いものを食べさせてもらえるから、毎日給食だとありがたいです」とおっしゃいます。確かにそうかもしれませんが、給食は１日３食のうちの１食だけです。あとの２食は保護者が作らなければいけません。だから「園がすべてを引き受けるのは違いますよね」と言うわけです。

こうやって、保護者の「要求」に対してはきちんと保護者に返して、考えてもらうのです。ただ、本当にサポートが必要なことについては、園の機能をフル活用して、保護者とともに解決しようと努めています。それは「要求」ではなく「必要性」のほうです。その見極めをきちんとすることがコツのような気がします。

「ニーズ」（必要性）の中に、「ウォンツ」（要求）まで含めて考えてしまうことはよくあると思います。２つの兼ね合いが難しいですね。

家庭と園と地域社会の関係を示すときに、図１のような正三角形のモデルがよく使われます。バランスの取れた正三角形の真ん中で子どもは育つというものです。このモデルを使い、最近では「地域と家庭が少しゆがんできているから地域や家庭の教育力を高めましょう」とも言われています。これは、正三角形を取り戻したいという話です。だけど家庭は様々で、昔に比べて幅が広くなっています。地域も同様です。だから私は、正三角形は無理だろうと思うのです。正三角形を求めようとすると、家庭や地域への要求が大きくなります。でもいくら要求しても、家庭や地域には受けられる耐力がない場合もあるのです。健全な家庭・健全な地域社会という前提が成り立たない時代に、幼稚園には何ができるのかを考えることが必要ではないでしょうか。

正三角形のモデルではなくて、私は図２のように考えています。つまり、子どもを中心として家庭がその周りにある。さらに外側に幼稚園があり、地域がある。子どもは変わらないけれど、家庭の機能が厚い家庭と薄い家庭がある。機能が薄い家庭に対しては幼稚園が果たす役割を厚くして、機能が厚い家庭には、園はそれに合わせた役割を果たせばよいという考え方です。地域の教育力についても同様です。家庭や地域の状況によって、園が機能を伸び縮みさせることが大切だと思います。

保育所も同様で、前提条件が崩れている中で、保育所だけが新たな役割を担うことは難しいと思います。あけぼの幼稚園は保育所を併設することで、スタッフの規模が必要数の1.5倍くらいになり、様々な場面で人材を確保することができています。

保育所とは違う、幼稚園の保護者へのアプローチの仕方や巻き込み方はあるのでしょうか？

幼稚園の保護者は昼間の時間があるという点で、保育所の保護者とは違います。だから幼稚園では、親をエンパワーメントすることが必要だと思います。子どもは、一定の環境が用意され、先生に見守られ、適切に援助されれば、十分に遊べますし、成長します。一方、保護者にはどう仕掛けるか。あけぼの幼稚園では、父親が企画するスキー会や、お母さんたちが絵本の読み聞かせをする活動があります。これらはすべて任意です。給食も、お母さんたちが当番制で配膳したり、皿洗いをしています。あけぼの幼稚園の保育は保護者に支えられているのです。保護者の方には感謝しています。

また入園説明会のときにはこう言っています。「幼稚園ではいろいろなことが起こります。子ども同士のトラブル、それが親のトラブルに発展することもあります。保護者と園がいがみあうことだってあります。でも、何も起こらない園がいい園だとは私は思いません。いろいろ起こった中で、保護者と園と子どもが考え合って、最終的にわかりあえる幼稚園がいい幼稚園だと思うのです。だから、いろいろあるから覚悟しておいてくださいね」と。実際、いろいろあります。それを「しんどい」と言う保護者もいます。そういう場合、私たちスタッフは寄り添いながら解決に努めますが、解決にいたらない場合もあります。うまくいくことばかりではないけれど、それも含めていろいろ起こるほうがいいと思っているのです。

▲満３歳児が入る「さくらんぼ組」の保育の様子。週３日幼稚園にやってきて、絵本の読み聞かせや手遊びなどを楽しみます。

▲この日は縦割保育の実施日。年齢の違う子どもが一緒に遊びます。

現場の実践紹介ー❷

子育て支援は、内容そのものの充実と人員面などの環境作りの両方が大切

預かり保育や地域の乳幼児親子への施設開放、催しの開催などの子育て支援に取り組んでいる、東京都にある文京区立青柳幼稚園の高圓（こうえん）元美先生に、その様子をお聞きしました。

東京都
文京区立青柳幼稚園

園長　高圓 元美先生

文京区立
青柳幼稚園

昭和43年、文京区立青柳小学校に併設して創立。「自分も相手も大切にしながら遊びを楽しめる幼児を育てる」ことを園内の研究主題とし、人とのかかわりを大切にし、外部との交流活動を積極的に取り入れた保育を行う。

園長●高圓 元美
所在地●〒112-0012　東京都文京区大塚5-40-18

URL　http://www011.upp.so-net.ne.jp/aoyagi-kg/

●おうちの方のニーズに応える「預かり保育」の実施

青柳幼稚園での保育の様子や預かり保育について教えてください。

青柳幼稚園は、４歳児クラスと５歳児クラス、それぞれ１組ずつの計２クラスからなる、小規模の園です。文京区立青柳小学校に併設して創立し、その後独立園になりましたが、園舎は小学校と同じ敷地内に建物があります。人とのかかわりを通した教育を大事にしていて、小学校との行き来も盛んですし、近隣の児童館や中学校、老人ホームなどとの交流活動も活発に行っています。

預かり保育も実施しており、園では「にこにこクラブ」と呼んでいます。平成13・14年度に、本園を含む文京区の３園が文部科学省の「幼稚園における子育て支援活動総合推進事業」の研究指定園となり、預かり保育を実施するようになりました。それが現在まで続いています。時間は、通常の保育終了後の14時から16時までです。前の月に預かり保育の実施予定日を保護者にお知らせして、申し込んでもらいます（1回につき300円の実費）。約50名の園児がいますが、預かり保育の利用は、5、6人から、多いときで20人以上のこともあります。

預かり保育の体制として、専任の先生が１名います。勤務は13時から17時で、その中の14時から16時に保育をしています。保育の前後の時間で、通常のクラス担任との連絡や引き継ぎを行っています。預かり保育専任ということで、子どもたちにも「にこにこクラブの○○先生」とすっかり親しまれています。預かり保育は通常の保育室とは別の部屋で行うので、子どもたちはいったん帰りの支度をして集合し、別室に移動し、簡単な手遊びなどをしてから自由遊びをしたりします。15時におやつの時間があり、片づけのあと絵本の読み聞かせなどをして、迎えの16時になります。

おうちの方からは、「もっと日数を増やしてください」という声が多いです。預かり保育は、おうちの方の子育て負担を減らしているメリットももちろんありますが、子どもにとっても、担任だけではないいろいろな大人とのかかわりができるという良さがあると思います。通常の保育でなかなか自分を出せなかった子が、預かり保育の時間に先生とじっくりかかわってもらうことで、落ち着いて帰ることができた、ということもありました。

●地域の乳幼児向けの子育て支援も喜ばれています

園外に向けた子育て支援についても教えてください。

本園の子育て支援の一つに、「あおやぎ広場」という施設開放があります。月に何回か、園の空き保育室を、地域の未就園の親子が自由に遊べる場として開放しています。時間は午前10時から11時半ですが、その後そこでお弁当を食べてもいいので、持参した昼食を食べながら、12時半ごろまで遊んで帰る方も多いです。「あおやぎ広場」は基本的に、集まった方に自由に過ごしていただくのですが、キッズスタッフとして、卒園生のお母さん方がボランティアで来てくださっています。乳幼児の親御さんにとっては、園を修了した子を持つお母さん方は、頼りになる子育ての先輩。育児の悩みを話したり、相談に乗ってもらったりしているようです。未就園の子どもたちが遊ぶ場であるとともに、おうちの方がリラックスできる

場にもなっています。

「あおやぎ広場」のうち、月に２回程度は「あつまれ３歳」という催しを行っています。名称は「３歳」ですが、未就園児なら３歳前でも参加できます。本園の非常勤教員が２名入り、親子で製作をしたりゲームをしたり歌を歌ったり、その日のプログラムを決めて行います。参加する親子はかなり多いです。続けて参加するうちに、保護者同士が顔見知りになったりして、横のつながりができてくるのがいいところです。「あつまれ３歳」のほうも、卒園生のお母さんがボランティアでお手伝いしてくださっています。卒園生のお母さん自身も、このお手伝いをすることに充実感を感じてくださって、引っ込み思案の方がどんどん外に出るようになったりすることも、これまでにありました。

▲この日は「あつまれ３歳」の開催日。地域の乳幼児・保護者が集まって活動します。

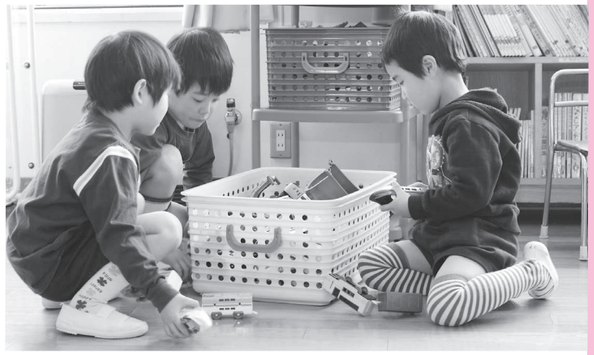
▲預かり保育の始まりです。４歳児と５歳児が一緒に過ごします。

預かり保育、地域親子への施設開放や、未就園児向けの催し。これらの子育て支援を実施してきた中で、気づいたことや感じたことはありますか。

乳幼児の保護者向けの支援をやっていて感じるのは、やはり今のおうちの方は、家で子どもと２人きりになりがちな密室育児の中で、「誰かに気持ちを話したい」と強く思っているということです。そこに、「お子さんは安全に遊ばせるので、どうぞその間にお母さん自身が存分にお友だちやスタッフと話してください」という受け皿があることは、子育てストレス解消にかなり役立っているのではないかと感じます。預かり保育も「とても助かる」という保護者が多いので、これからもこういった子育て支援のプログラムを継続することは大切だと思っています。

今後、子育て支援を取り入れる幼稚園は増えていくと思われますが、子育て支援の実施のために大事と思われることは何でしょうか。

子育て支援のための環境を整えていくことが、とても大事な仕事になってきます。本園の場合だと、現在使っていない空き教室を子育て支援に使えたり、人員的にも、子育て支援専任の教員を自治体で配置してくれているので、このようなプログラムが実施可能なわけです。これを、例えば通常のクラス担任だけでやろうとしても、なかなか難しいと思います。こういう子育て支援のための環境作りは、これからの幼稚園に共通する大きな課題ではないかと思います。



▲少人数の預かり保育の中で、子どもたちはゆったり遊びを楽しんでいます。

ベネッセ次世代育成研究所について

設立にあたって

日本では、少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの成育環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、多様な価値観やニーズに対応し、個人や家族の生活視点を大切にしながら、子どもや家族が「よく生きる」ための調査研究をしています。

また、子育て世代、これから子どもをはぐくむ世代のそれぞれの視点に立ち、社会文化的・知的・物質的資産を次世代に伝える社会システムをどのように構想するかといった視点から調査研究、提言をしています。それによって、子ども自身の成長と、子どもを取り巻く地域や世代を超えた関係性が強くなることに貢献することを目指しています。

一生を通して人生のそれぞれのライフステージの「よく生きる」を支援し、次の世代、さらにその次の世代が未来に向かって進むべき道標を示すことができればと願い、学術的な調査研究と体系的な理念の構築、事業・社会への還元を目指して、2006年にベネッセ次世代育成研究所を設立いたしました。

ホームページもご覧ください

当研究所が行った調査速報版の無料ダウンロード、詳細な調査結果を掲載した報告書の購入申し込み、調査研究活動の最新情報については、ホームページにてご確認ください。

http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/

（各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください）

園便りにも使える、乳幼児の保護者を対象とした調査結果もご紹介しています！

乳幼児を持つ父親に、家事・育児への参加度や子育て観をたずねた調査結果や、テレビ・ビデオとのよりよい付き合い方に関する研究成果、また妊娠・出産・子育ての実態を明らかにした調査結果などを掲載しています。

乳幼児を取り巻く環境変化や保護者の理解、保護者への情報発信に、ぜひご活用ください。